水の恵みに感謝する龍神祭

田植えの始まり告げる水分祭

秩父今宮神社

今宮神社の大ケヤキの前で行われた龍神祭＝4月4日、埼玉県秩父市の今宮神社

前日の冬日がうそのような陽光が降り注ぐ4月4日、埼玉県秩父市にそびえる霊峰武甲山（ぶこうさん）に棲む水の神・八大龍王が降臨し、境内の龍神池に伏流水が噴き出す今宮神社（塩谷崇之宮司）で、龍王神の神徳、水の恵みに感謝する「龍神祭」が大ケヤキ「龍神木」の前で斎行された。同日午後には、秩父神社（薗田稔宮司）から神部の一行を迎え、田植えのため霊水を分ける水分祭が古式ゆかしく行われた。

午前10時半、まだつぼみの固いケヤキの巨木に爽やかな春の風が吹き渡る中、祭事が始まった。幹回り約9メートルの大ケヤキは樹齢約1300年で埼玉県の天然記念物、境内の「清龍の滝」は環境省の「平成の名水百選」に選ばれている。

祭主・塩谷宮司の祝詞奏上などに続き、本山派修験の瀧田顕浩先達の主導で般若心経の奉読が行われ、地元中学生の巫女による「豊栄舞（とよさかのまい）」が奉納された。

次いで、今宮神社の塩谷子前宮司をはじめ責任役員の鷹啄忠男氏、氏子総代の井上貞雄氏、奉賛会会長の浅賀克彦氏、埼玉県議会前議員、秩父市議会議員、地元の中町会会長の高橋亘氏、環境省総合環境政策統括官の中井徳太郎氏、関係団体代表など約150人の参列者がそれぞれ玉串をささげて拝礼し、祭主の一拝で祭事を終えた。

直会の席で、神道で重視されている大麻を用いて天地の結び・天地の祓い清めを主座とする「天麻那舞（あまなまい）」が、村上舞那さんと一社・日本燦々の女性たち約20人によって奉納演舞された。

挨拶に立った塩谷宮司は社殿造営を報告し、協力者・関係者に感謝の言葉を述べた上で「八大龍王の守りで武甲山の水が秩父を潤し、荒川に注いで下流域の江戸・東京の人たちに恵みをもたらしている。明治の神仏分離令で龍神祭は行われなくなったが、昭和になり崇拝者の支援で復活できた。午後の水分祭は、秩父の水の循環の始まりで、12月の夜祭で終わる。この水が日本中を潤すことを祈る」と述べた。

挨拶に立った環境省の中井氏は「21世紀を開くキーワードは命の原点に戻ることで、自然の恵みに目を向け、私たちも自然の一部であるという感性を取り戻したい。地域循環共生圏は閣議決定された構想で、今や地球温暖化を止めようとする世界の潮流になっている。森・里・川・海をキーワードに秩父はそのモデルになってほしい」と語った。

水分祭で今宮神社の塩谷崇之宮司（左）から水麻を受け取る秩父神社の薗田健権宮司

古くから霊泉が湧く今宮神社の地には、命の源イザナギ・イザナミの神が祀られていた。古伝によると、当地に暴れる龍がいたのを、大宝年間（701～704）に飛来した修験道の開祖・役小角（えんのおづぬ）が、仏法を守護し観音菩薩の宝珠（魂）を宿す八大龍王を合祀して鎮め、八大宮を建立し、秩父霊場を開いたとされる。

当初は修験の寺で、後に「今宮坊」と呼ばれ、平安時代には寺院や神社が立ち並ぶ一大修験道場・観音霊場を成していた。江戸開幕の前後から、京都・聖護院の直末寺として隆盛を極めたが、明治初めの神仏分離により、今宮坊は「今宮神社・八大宮」と「今宮観音堂（秩父札所十四番）」に分けられた。戦後、境内が無償開放され、平成に入って八大龍王の復興が進められ、行者堂、手水舎、お札場などが整備された。

武甲山は妙見山とも呼ばれ、古くから妙見信仰が根付いていた。八大龍王が妙見菩薩の守護神であることから、今宮神社では平成元年より毎年、龍神祭を行い、近年はパワースポットとしても人気が高まっている。

同日午後1時半、白装束で鍬を担ぐ農民に扮した、秩父神社の氏子たちの神部（かんべ）一行が今宮神社に到着すると、同社の水の恵みを授ける「水分祭（みくまりさい）」が、竣工されたばかりの社殿で行われた。

水麻（みずぬさ）授受の儀では、神部代表の黄色装束の作家老が水麻を秩父神社の薗田健権宮司に渡し、さらに今宮神社の塩谷宮司に渡され、本殿に奉斎された。今年の作家老を務めるのは80歳の浅見弘さん。

次に、塩谷宮司が水分の祝詞を奏上し、続いて薗田権宮司が水乞いの祝詞を奏上し、豊作を祈念。代表者の玉串奉奠が終わると、御神酒とダイコンの薄切りを参列者一同が頂く。八大龍王の御神徳、水の御恵みを宿した水麻が、今宮神社宮司から秩父神社権宮司へ、さらに作家老へと授与されると、祭りは終了した。

秩父神社で御田植祭

豊作祈り神部が農耕の所作

秩父地方の総鎮守・秩父神社では毎年4月4日、一年の豊作を願う「御田植祭」が斎行される。しめ縄が張られた境内を神田に見立て、八大龍王神の御神徳に感謝するため、神社の表の鳥居を水口に見立てる龍の形の稲わらが巻き付けられていた。

埼玉県の無形民俗文化財に指定されている御田植え祭は豊作を祈る予祝神事で、奉仕するのは保存会の会員たち。神部は白い白丁の衣装で、作家老は黄色い装束。40年前から作家老を務めている浅見弘さん（80）は、伝統の所作を威勢よく演じた。

午後1時、薗田稔宮司以下神職・作家老が昇殿し、社殿前の神部たちと「御本殿の儀」を斎行。神前には、昨年の新嘗祭に供えられた抜き穂のもみ1升2合が供えられ、豊作を祈念する祝詞が奏上された。玉串を奉奠の後、山の神（水神、龍神）の依代である水麻を宮司が本殿から取り出し、作家老に手渡された。

午後1時半、水乞いの御神幸「お水乞い行列」が今宮神社に向かう。神職に先導され、笛と太鼓などの楽士を伴い、水麻を掲げた作家老と竹で作った鍬を担ぐ神部たちが町を行く。約10分で今宮神社に到着すると、水分祭が行われた。

今宮神社の神前で新たな水の恵みを宿した水麻を掲げた神部ら一行は、秩父神社に戻ると、作家老は水麻を水口の龍の頭近くに刺し立て、御田代に水が引き入れられたことを示す。その後、作家老と神部たちは白米と塩で煮た大豆の汁椀を供され、しばし腹ごしらえ。

午後4時、田仕事の所作が始まる。まずは「田打ち」で、「御代の永田に手に手を揃えて、急ぎや早苗～」と「田植歌」を歌いながら、作家老を先頭に鍬を振り下ろす。次に「くろぬり（畔ぬり）」で、神部は鍬で土をかき上げ、張り付ける動作をする。

次は馬を使う「代掻き」。神部2人が鼻取竹（馬）の両側を持ち、後ろから神部1人がササラで馬を叩き、田代を走らせる。そして、神部が鍬を振りながら「田ならし」をし、作家老と神部一人が籠に入れた種もみを苗代にまく。この種もみは、昨年の秩父夜祭で大前に供えられたもの。

休憩の後、再び田打ち、くろぬりがあり、「肥料まき」では切りわらがまかれる。代掻き、田ならしに続いて、いよいよ「田植え」。神部たちは後ろ向きで苗に見立てたわらを植えた。最後に、秋の収穫を示す「餅まき」があり、無病息災・開運招福をもたらす縁起物の餅が見物客に配られた。

ユネスコ無形文化遺産に登録されている12月3日の秩父夜祭では、水口のわらの龍神が大真榊を立てる榊樽に巻き付けられ、御神幸行列の先頭を進む。

夜祭は豊作をもたらした「お水」を武甲山の山の神に返す、新穀感謝の祭り（新嘗祭）でもある。これにより、春の水分祭・御田植祭で始まった水の恵みが一巡し、秩父は無事に新たな年を迎えることができるのである。

秩父神社の境内で田打ちの所作をする神部たち＝4月4日、秩父神社

春の宝物展「皇室からの御下賜品（いただきもの）」

東本願寺への皇室の思い

嵯峨本願寺

明治天皇から下賜された「見真大師号勅額（原本）」と大谷光道法主

京都市右京区嵯峨にある本願寺（大谷光道法主）で春の法要の折、恒例の闡如會（せんにょえ）記念春の宝物展「皇室からの御下賜品―東本願寺近現代のあゆみ―」4月7日から13日まで開催され、明治時代前後から近現代に至るまでに皇室から頂いた数々の品が展示されている。

出展された孝明天皇からの御下賜品は「御宸翰浄土三部経」「金鳩銀竹節杖」「黒塗富士蒔繪文庫硯」「四分一銀象眠富士山模様御花生」「象牙猿蟹置物」「千羽鶴金蒔梨地裏巻煙草筥」、大正天皇と貞明皇后からは「鴛鴦置物」「昭和天皇からのは「西洋茶器」「ボンボニエール」、香淳皇后からのは「掛軸和歌」、ほかに見真大師号のための「御紋附龍彫額　勅額雛形図」「勅願奉告式表白文」など。

本願寺の春の宝物展は平成最後の今年7回目で、御代代わりの年を記念し、皇室からの御下賜品を展示することになった。時代は幕末から大正までで、東本願寺法主家と皇室との縁戚関係から、いろいろな品が下賜されてきた。幕末では安政の大獄の2年後に、東本願寺で親鸞聖人の600回御遠忌が営まれた折、孝明天皇から浄土三部経が下賜された。

東本願寺は寺地を徳川家康から寄進されたことから幕府と強いつながりがあり、幕末では佐幕派と思われていたが、下賜品を通して朝廷との関係も良かったことがうかがえる。

大正天皇と貞明皇后から下賜された「鴛鴦置物」

明治12年には親鸞聖人に見真大師号が贈られ、さらに明治天皇の勅額が下賜された。それまで本堂が3回焼失し、そのたびの再建で東本願寺も疲弊していたが、見真大師号の勅額を下賜されたことで再建の気運が高まるなど宗門に大きな影響を与えたという。

大正時代になると、それまでは儀礼的な下賜品が多かったのが、親密な親戚関係としての下賜品が多くなる。

東本願寺第22代法主現如（大谷光瑩）の娘恵子（やすこ）が九条道真の妻となり、大谷家と縁戚になった九条家から皇室に入った貞明皇后からの下賜品が多い。また、24代闡如（大谷光暢）の智子夫人（久邇宮邦彦王三女）は香淳皇后の妹に当たる。

現代神社と実務研究会会員総会

西岡和彦教授が講演

芝大神宮

3月8日、東京都港区の芝大神宮で現代神社と実務研究会（勝田博之代表）の会員総会が行われ、総会の後、國學院大學神道文化学部教授の西岡和彦氏が「出雲大社の神仏習合と分離」と題し講演した。

昇殿参拝の後、同研究会会長の勝田博之芝大神宮宮司が挨拶。平成30年度の活動報告、決算報告、監査報告が行われ、満場一致で承認された。

続いて、平成31年度活動案が出され、金子義光氏（中野島神社宮司）が予算案を発表し、満場一致で承認された。その後役員の交代の報告がなされた後、会員総会が閉会した。

講演する西岡和彦國學院大学教授＝3月8日、東京都港区の芝大神宮

続いて、西岡和彦國學院大學教授が次のように講演した。

『日本書紀』では天日隅宮（あめのひすみのみや）と呼ばれる出雲大社は天上の日の神様のお住まいと遜色ない宮殿だ。御祭神は大国主大神で、大変古い歴史がある。出雲国は神様の国というイメージだが、仏教とのかかわりも古い。持統天皇の時代に銅像観音菩薩立像が出雲国で作られているので、飛鳥時代に仏教が伝わっていた。

鎌倉時代の絵図をみると、右側に吉野川、左側には素鵞川（そがのかわ）が流れ、周りに土塀があり、建物は朱塗りになっている。江戸時代になると本殿の周りに塀が作れ、境内地に仏教施設が一つもないのは大変珍しい。

この地に古くから勢力を持っていたのは鰐淵寺（がくえんじ）である。境内地に本格的に仏教が入ってくるようになったのは戦国大名の尼子経久の時代で、出雲の神様と仏様を一緒に参拝できるようにと考えたからである。

それまで出雲大社の遷宮の費用は幕府が出していたが、戦国時代は幕府が疲弊して費用を出せなくなり、建物も老朽化した。そこで戦国大名にスポンサーになってもらうしかなく、だから彼らの言うことを聞かなければならなかったのだろう。彼らの意向で境内に三重塔や鐘楼が建てられ、出雲大社の周辺で神仏習合が進んだ。

神仏分離を始めたのは江戸時代、出雲大社神職の佐草自清（さくさよりきよ）と松江藩主の松平直政で、直政は徳川家康の孫で、大坂夏の陣に出陣し、人々から尊敬されていた。その直政が出雲大社の意見を取り入れた。幕府の学者に出雲大社の歴史を説明するため神職が交渉の場に加わり、佐草自清と寺社奉行との間に深い信頼関係が築かれるようになる。最終的には幕府が松江藩に、出雲大社から仏教施設を移転させることを命じた。

出雲大社の周辺も神社の町になり、東西800メートル、南北600メートルの空間に神道だけの町を造った。これが現在我々が見ている出雲大社である。玉垣を作り、川の流れも変えた。八足門の前には階段があり、階段を上がると楼門をくぐる。本殿の所だけ高くしているので、遠くからでも見えるようになった。

松平直政にとって将軍から頂いた金で出雲大社の本殿を守ることは、将軍に対する御奉公であった。そのため、かなり高いところに本殿が建てられた。

もっとも神仏分離はしたが、先祖に奉仕する寺との関係には佐草自清も口を出さず、仏教との関係は明治時代になるまで続いた。

新移動システム（階段のバリアフリー）
宗教施設の参拝者用に最適！
（2～6人乗り小型モノレール）
［低価格実現］
株式会社 嘉穂製作所
サービスセンター：東京　大阪　福岡
かほモノレール　検索
http://www.kaho-monorail.com　TEL 0948-72-0390

日本はオレがよくする！
東京湾アクアラインから日韓トンネルへ
金澤義春 著
四六判230頁　本体1500円＋税
戦後70年、元気喪失の日本人に、喝！
戦後、福島から川崎へ。徒手空拳で不動産業を始め、川崎駅西口大通りに自社ビルを建設して東洋医学の治療院を開設。駅前再開発に伴い、日本初の罰金つきポイ捨て禁止条例を川崎市に提案して街をきれいに。日韓トンネルの夢に共鳴し、建設推進のため対馬、壱岐、唐津の現場に大好きな桜数百本を植樹している。
超元気な84歳が語る奇想天外、抱腹絶倒の人生論。
• 川崎市「ポイ捨て禁止条例」を実現
• 日本最強の町内会長
• 私もホームレスだった
• 不動産業で身を立てる
• さくら治療院・東洋療術学院を開設
• 日韓トンネルにかける夢
• 子供たちが健全に育つ社会を
• 金澤式健康五原則
日本はオレがよくする！
東京湾アクアラインから日韓トンネルへ
金澤義春 著
アートヴィレッジ
〒657-0846　神戸市灘区岩屋北町3−3−18・4F
受注センター TEL.078-882-9305　FAX.078-801-0006
http://art-v.jp